



中国におけるマルクス主義文献の初期受容に関する研究 日本からの伝播・翻訳を中心として

著者	盛 福剛
号	21
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	経博第167号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00121331

氏 名（本籍地）	せい ふくごう 盛 福剛
学 位 の 種 類	博 士（経済学）
学 位 記 番 号	経 博 第 167 号
学位授与年月日	平成 28 年 9 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科、専 攻	東北大学大学院経済学研究科（博士課程後期 3 年の課程） 経済経営学専攻
学 位 論 文 題 目	中国におけるマルクス主義文献の初期受容に関する研究 —日本からの伝播・翻訳を中心として—
博士論文審査委員	（主査） 教 授 守 健 二 教 授 日 置 史 郎 名誉教授 大 村 泉（東北大学）

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国におけるマルクス主義著作を含む社会科学文献の翻訳史を、翻訳時期によって第一部「民国以前」、第二部「民国時期」に分けて検討する。第一部では、實藤恵秀をはじめとする日本人研究者たちにみおとされていた、日清戦争前の日本への文化輸出国であった清国の代表的な知識人魏源による漢訳西洋地理史志や法律書の日本への伝播、経済学古典の『国富論』の翻訳において、嚴復による独自の貢献を明らかにする。

さて、本論第一部の構成は、以下のとおりである。

第一部 民国以前社会科学文献の伝播

第1章 清末「洋務運動」前後社会科学文献の翻訳

第2章 日本留学風潮と留日学生 of 社会主義文献の翻訳

第 1 章では、魏源による『海国図志』と漢訳『万国公法』の日本への伝播、嚴復による独自の翻訳を論述する。アヘン戦争で西洋文明摂取を痛感した清朝知識人の魏源は林則徐の委嘱を受け、1844～52 年にかけて各国の地理と歴史を紹介する『世界地理大全』を『海国図志』として編訳・刊行した。この本がアヘン戦争の情報とともに日本に伝来された。当時外国船の出没に危機感を持つ日本志士たちはこの本に激しく刺激された。1864 年に成書となった漢訳『万国公法』も、刊行後すぐに長崎に輸入され、その翌年に明六社の会員によって日本語に翻刻されると、幕末・明治初期の法律用語や、通

常の漢語語彙に与えた影響が大きかった。アロー戦争の戦敗により屈辱的な北京条約を締結した清朝政府は、西洋の近代的軍事工業を導入したり、西欧各国へ留学生を派遣したり、「自強」・「求富」を目指す「洋務運動」を始めた。1870年代末に英国に留学した嚴復は、西洋文献の翻訳に当たり、「群己權界」(liberty)、「天演」(evolution)、「愛理学」(philosophy)、「群学」(sociology)、独自の造語によって表記した。しかし、新造語の多くが、中国語では定着せず、後に和製漢語によって置き換えられた。第1章ではその原因を探究する。

明治維新までに、日本は中国から間接的に西欧文化を吸収したが、日清戦争後、日本留学風潮により逆転を迎えてきた。第2章では、留日風潮と原因、清末民国時期留日学生数の変遷を紹介した後、留日学生・政治亡命者の翻訳活動と日本で社会主義思想の受容を詳述する。中国人の大規模な日本留学ブームは張之洞と梁啓超の呼びかけによって煽動されたという。清国が日本に敗れた翌年の1896年に13名の清国留学生が日本に派遣された以来、留学生の数は次第に増加し、1906年に8000名ほどに達したと言われる。陳独秀・陳溥賢・郭沫若などをはじめとする進歩的文化人は、日本でマルクス主義思想を受容することにより、マルクス・エンゲルス原著を含むマルクス主義文献を日本語から翻訳・紹介する記事の序幕を開いた。

第二部では、日中の研究者たちによって十分に検討が行われていない中国におけるマルクス・エンゲルスの主要著作の普及史を、独英日中の原典と翻訳そのものに立ち入り、各文献を照合しながら考察する。中国の革命実践活動に大きな影響を及ぼし、そして今さらにも社会主義建設に指導的綱領にあたるマルクス・エンゲルスの代表作『ドイツ・イデオロギー』と『資本論』がいかなる経路で西欧から日本経由で中国に伝播されたのかという課題に照明を当てる。

本論第二部の構成は、以下のとおりである。

第二部 民国時代マルクス・エンゲルス主要文献の翻訳普及史

第3章 中国における『ドイツ・イデオロギー』普及史の起点

第4章 陳啓修による『資本論』初訳(1930)と翻訳術語の継承

第5章 郭大力・王亜南による『資本論』全訳(1938)の成立過程

第6章 建国後『資本論』の翻訳

第3章では、初期マルクス・エンゲルスの代表作の一つである『ドイツ・イデオロギー』の日中普及・翻訳史に絞り込む。中国初の『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォイエエルバッハ」の翻訳は郭沫若によって試みられ、1938年に上海言行出版社より『德意志意識形態』と云うタイトルで公表された。この翻訳は1947年上海群益出版社から同名で再版されたが、郭自身は同書の「序」でこの翻訳が成立したのは「20年前」と記している。南京大学教授張一兵は、2007年に郭訳を翻刻・刊行した際、特に根拠を付すことなく郭訳は1931年に行われたと述べている。これに対して、清華大学韓立新教授は1947年の「序」を論拠に、郭訳は1927年に作成されたものであると指摘し、中訳を作成する際、郭沫若は、1926年に刊行された櫛田・森戸訳を収録した『我等』雑誌版を参考にしていると推定した。

本章では、中国マルクス主義哲学界を代表する研究者韓と張が郭訳成立に関する事実認識で齟齬を来していることに着眼し、郭版出版経緯に関する検討を加え、成立時期の推定では張が正しく韓が誤っていることを解明した後、張が全く触れず、韓が一部誤って触れた郭版と日訳との関係につ

いて立ち入った考察を行う。筆者は1927年に郭版は成立していてそこには雑誌『我等』からの影響が見られるという韓の推定を否定し、訳語、訳注または誤訳の踏襲から、郭版の実質的な翻訳底本は森戸+櫛田の『我等叢書』版であり、リャザーノフ版は必要に応じて適宜参照されたに過ぎないことを明らかにする。郭はおそらく、1931年に千葉県の自宅で翻訳を作成した。郭訳は、当時治安維持法によるマルクス主義弾圧の中、日本の良心的な郭の支援者とその協力に応えた郭自身の真摯な取り組みによって初めて完成されたのであった。

第4、5、6章では、中国における『資本論』の翻訳普及史をその翻訳者と出版時期によって3系統に分けて概観する。本部分で主に扱われる中国語翻訳は、次の訳本である。

(1) 陳啓修による翻訳

馬克思著陳啓修譯(1930)『資本論 第1巻第1分冊』、上海昆侖書店。

(2) 王亜南・郭大力による翻訳と改訂版

①馬克思著郭大力王亜南譯(1938)『資本論』(全三巻)、上海読書生活出版社。

②馬克思著郭大力王亜南譯(1953～56)『資本論』(全三巻)、人民出版社。

③馬克思著郭大力王亜南譯(1963)『資本論』(全三巻)、人民出版社。

(3) 建国後郭・王訳改訂版に基づく中央編訳局の改訳

①中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局訳(1972～75)『資本論』(全三巻)、人民出版社。

②中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局訳(2004)『資本論』(全三巻)、人民出版社。

第4章では、陳啓修による中国最初の『資本論』の翻訳(1930)と、翻訳の原本であるカウツキー民衆版の第8版(1928年版)、ベルリンのJ. H. W. Dietz Nachf. G.m.b.H.より発行されたドイツ語版と、日本語初訳である高畠素之訳『資本論』決定版の改造社版(1927～28)と、岩波茂雄から依頼されて河上肇・宮川實による文庫版『資本論』(1927～28)との関係を、各訳文を比較しながら、重要な術語、訳注と誤訳の踏襲から検討する。一言で言えば、東京帝国大学を卒業した陳啓修による翻訳は、日本語訳を底本として、カウツキーの民衆版を参照しながら訳出されたものであり、1927年に岩波書店より刊行された河上・宮川訳の『資本論』第1分冊と第2分冊の重訳である、と推定できる。ここでも、『ドイツ・イデオロギー』と同様に日本語訳が中国語版の出現に大きく関与したことになる。

第5章では、1938年8月に上海で出版された中国最初の『資本論』全三巻の翻訳を取り上げる。この翻訳は郭大力と王亜南が分担翻訳し、上海の読書出版社より刊行された。1970年代に出版された中央編訳局版の『資本論』もその改訂版に基づく新訳であるが、中国の『資本論』の普及史においては、郭大力と王亜南による翻訳は最も影響力をもった版本である。ここでは、まず第1に、陳訳以後に出現した諸抄訳の特徴を概説した上で、郭・王訳の成立過程を分析し、この中国最初の『資本論』全3巻の翻訳でも訳者の言明が必ずしも正確ではなく、日本語訳を相当程度参照したもの、重要な経済学上の術語やマルクスに特有の表現が、例えば、「Kapitalistenklasse」→「資本家階級」、「Ausbeutung」→「搾取」、「einstellen」→「採用(する)」などの翻訳が、当時としては参照可能であった高畠素之訳と河上・宮川訳から取ったものであり、郭・王訳の日本語訳への依存を指摘する。第2に、翻訳者の郭大力と王亜南の翻訳分担、留日経歴を持つ王亜南による日本語から翻訳術語の導入を明確にし、實藤の

著作に記録された日本語来源の中国語を基準にして、中国最初の『資本論』全訳に登場する術語のうち、日本語来源とみられる術語の点数を明らかにする。結論を先取りすると、最初の中国語訳『資本論』第1巻の学術的な翻訳術語のうち、実に約九割が日本語来源ないしは日本語訳に一致するのである。

第6章では、建国後郭による2回の改訂における術語の改訳から考察を開始し、「脱日本語」の傾向を指摘する。次に、二つの漢訳術語、「公社」(Gemeinde、Gemeinwesen、Kommune)と「工人」(Arbeiter)を取り上げ、中国語におけるその訳語の由来と変遷を検討する。その後、「公社」の出自、Gemeinde、Gemeinwesen、Kommune三者概念の同等性及び「共同体」から「公社」への改訳に看過できない歴史背景を取り上げる。最後に、「労働者」と「工人」に訳出されたArbeiterの具体例を分析し、中央編訳局による翻訳区分の基準を解明する。

本論文の結論では、上記第一、二部の考察結果を要約して提示するとともに、中国人研究者が今後銘記すべき課題について問題提起を試みたい。

論文審査結果の要旨

盛福剛氏の学位請求論文の主たるモチーフは、マルクス主義文献、特にマルクス・エンゲルスの代表的著作である『ドイツ・イデオロギー』や『資本論』が、如何にして中国で受容されるに至ったのか、その特徴は何か、という問題を、日本と中国における両著作の翻訳術語の相互比較と変遷史を切り口に解明するところにある。本論は「民国以前社会科学文献の伝播」を扱う第一部全2章と、「民国時代マルクス・エンゲルス主要文献の翻訳普及史」を扱う第二部全4章からなり、冒頭に問題関心を記した「まえがき 本論文の課題」を、末尾には「本論文の結論」を配置する。さらに、「参考文献」とは別に、論文全体の掉尾に、「付録」として詳細な「建国前中国マルクス・エンゲルス文献の出版目録」を掲げる。

盛氏は、第一部の2つの章で、實藤惠秀や石川禎浩らの日本人の先行研究を、中国人研究者の研究によって修正補完しつつ、19世紀の70年代までは、中国は、欧米社会科学文献の導入で日本をリードする立場にあったが、日清戦争の敗北後に立場が逆転したこと、その結果マルクス主義文献の導入も日本への留学経験者が担うことになったことを明らかにする。第二部の4つの章では、中国国内で未決問題となっている中国最初の郭沫若訳『ドイツ・イデオロギー』の出自を取り上げ、これが1931年に櫛田民蔵・森戸辰男の日本語訳を底本に適宜ドイツ語版を参照して訳出されたこと、最初の中国語版『資本論』も同様に、河上肇・宮川實及び高島素之の日本語訳から大きな影響を受けたこと、しかし戦後の一連の中国語訳、特に最近の編訳局訳では、例えば、労働者(Arbeiter)→工人(部分);搾取(Ausbeutung)→剥削;共同体(Gemeinde、Gemeinwesen)→公社;国民(Nation)→民族、等々の脱日本語化の傾向が見られ、最新版編訳局訳『資本論』第1巻では、「工人」術語と「労働者」術語が併用されたことで第4章と第24章の要の箇所では論理体系上の「不整合」が生じたり、「公社」訳語によって『資本論』で言及される Gemeinde、Gemeinwesen の自生的性格が曖昧にされるという問題

が生じていることを指摘している。

以上から、本論文は、中国におけるマルクス主義の受容の出自は日本にあり、多くが日本語から中国語に翻訳されたことを、独・日・中の緻密なテキスト解析により実証した日中学術交流史に関する重要な貢献である。とくに第二部における『ドイツ・イデオロギー』の中国訳の起源に関する論考は、中国での論争における定説を覆し、すでに大きな注目を集めており、日本でも専門家の審査を経て専門書や関連学会の機関誌に掲載されている。「工人」、「公社」、「民族」術語に関する氏の問題提起は、今後さらに編訳局での調査検討を経て、日中両国間の専門家の間でさらなる学術的展開が期待される。論文掉尾に収載された前記目録は斯学関係者に裨益するところ大であろう。以上から本論文の審査結果は「合格」である。